



創刊にあたって

学校法人四天王寺学園
理事長

森田 俊朗

学生諸君へ

去年の東日本大震災のあと、諸外国の人は略奪や暴動が起きても不思議でない状況の中で日本人のとした秩序ある行動を絶賛しました。

「規律正しい国民性」「教育水準の高さ」「武士道が生きている」など海外のメディアは様々に報じましたが、私はその中で「日本人は他人に迷惑をかけることを第一の生き方とする国民だ」というのが最も射ていると思いました。人を愛する、人を信ずるという積極的な生き方の前に人に迷惑をかけないとい

う控え目で慎ましい行動は日本人の世界に誇る美德であり、これこそ長い歴史を経て日本人の中に根づいた仏教そのものだと思います。又、これに限らず、私達は日頃から自らの中に持っている仏教的規範によって善悪を判断していることに気づかないまま平和に生活しているのです。「あなたの宗教は？」と聞かれて「無宗教です」と答える人は多いのですが、それは本当に宗教心が無いのではなく、宗教の自覚が無い、又自覚する機会が無い、ということだと思います。

その点、本学の学生諸君は仏教の一端を知るとともに自分の内にある仏心に気づくチャンスを与えられていることを幸運と思わなければいけません。仏教は決して難しいものではありませんし、入り方にも決りはありません。写経からでも座禅からでもお寺巡りからでも又、手塚治虫の「ブッダ」を読むことからでも良いのです。チャンスを生かして下さい。生かしてこそチャンスです。



創刊にあたって

四天王寺大学学長 兼
仏教文化研究所所長

西岡 祖秀

聖徳太子の人間教育

本学は聖徳太子が593年（推古天皇元年）に建立された四天王寺四箇院の一つである敬田院を起源としています。その設立理念は「一切衆生、帰依渴仰、断悪修善、速證無上、大菩提処」すなわち「人々が仏に帰依し、戒律を守って諸悪をなさず、善行を修め、仏の智慧をさとるところ」とされています。ここには人間として歩むべき道が簡潔明瞭に示され、その到達点は「仏の智慧」をさとることであるとされています。こ

こにいう「仏の智慧」とは、聖徳太子が強調された大乘仏教の「空（くう）の教え」であるといえます。「空」とは、世の中のすべては変化していくものであり、絶対不変の状態などないという意味です。これを現実のわたしたちに当てはめると、常に世間的な常識や既成観念のとりこになっている自分から自由になるということです。とらわれの心を捨て、自由な発想を持つということです。その根本は自分のみを大切に思う自己愛を捨て、常に他者に心を寄せ、他者とともに生きる道を歩むことです。その結果、「和（協調）」の世界が実現されるのです。これを身をもって実践されたのが聖徳太子であり、その思いが四天王寺四箇院（敬田院・悲田院・施薬院・療病院）として結実したのです。この聖徳太子の人間教育の理念を理解し、現代に受け継ぎ活かしてゆくのが、わたしたちの責務であるといえるでしょう。

■ 特集 平成24年度新入生授戒会を終えて

— 新入生の学びの誓い —

平成24年度の本学新入生を対象とする授戒会が、和宗総本山四天王寺管長奥田聖應猊下の戒師のもと、4月14日、四天王寺五智光院において厳修されました。

本学の祖聖徳太子は、人間の在るべき姿を「和」として世に示され、人間のあらゆる行為の基底に「仏の教え」を据えるべきことを教えられました。「仏の教え」は「無我」の教えであり、人をして「我執」を解脱した普遍的な主体へと生まれ変わらせる教えであるからに他なりません。

「戒」は、自己の心身により習慣を付けることであり、体得すべき人としての在るべき姿が、「五戒」「十大受三聚淨戒」等の教えとして説示されています。「戒」の受容と実践は、太子の教えを建学の精神とする本学の学生にとって、有意義な学生生活を実現するための大きな力となるに違いありません。

「戒」を伝授する法儀としての「授戒会」は、人としての進むべき道を学ぶ場であり、同時にその道に邁進することを決意する場でもあります。「よく保つ!」と、繰り返し三度その実践を誓った「戒」を常に思念し、心身を整え、より高き人格の形成に向けて日々精進されることを念願致します。



— 授戒会に参加して —

「献花を努めました。厳かな雰囲気の中で気も引き締まり、真剣に聖歌を歌うことができました。この学校でしか学べない聖徳太子の教えを学び、社会人となってからも大切にしていきたいと思います。貴重な体験をさせて戴き、本当にありがとうございました。」(人間福祉学科)

「私にとって、とても貴重な時間になりました。今までの生活や学校などでは仏教に関わる事がなかったので、何かも新鮮でした。目標を持って、きちんと自分で考え、人と心のつながりが持てるよう努力し、有意義な学生生活を自分の手で作っていきたいと思います。」(社会学科)

「謝恩の辞を務めました。かまないように何度も何度も練習し、声のトーンや早さにも気を付けました。とても緊張しましたが、折角の大学生活、何事にもチャレンジしようという気持ちにさせてくれました。大事な儀式に新入生の代表として出席できたことを嬉しく思います。」(教育学科)

礼 拝 特 集

四天王寺大学では「建学の精神」や「学園訓」を学ぶ実践的な授業「仏教」が必修科目とされ※、毎週、1000名余りの学生と全教員とが大講堂で一堂に会し、礼拝・瞑想・講話・写経・聖歌斉唱などを内容とする、他大学にはない特色ある授業を行っています。

1年生が出席する「仏教Ⅰ」は、西岡学長・森田理事長から総括的なお話のあと、礼拝の次第に沿って仏教の教えを平易に解説するとともに、学生によるカンボジアでのボランティア体験報告のほか、仏教聖歌の歴史、仏像の多様さ、心身の健康に関する内容も盛り込まれた全体構成でした(全ての講師・講話題目は右記の通りです)。

多くの学生には初めての仏教の話だったでしょうが、真剣に耳を傾け話の要点や感想を書き留めました。また、先輩たちのボランティア体験談も刺激的だったようで、大きな拍手が湧きました。

冬学期の「仏教Ⅱ」は写経を主体とする授業内容となります。静寂の中、今ここにあるかけがえのなさに気づき、自分を見つめる習慣は、人生に活力を与えてくれるはずです。

※平成23年度以前入学生は「仏教Ⅰ～Ⅳ(2年間)」、平成24年度以後入学生は「仏教Ⅰ・Ⅱ(1年間)」が必修科目となっています。

卒業生インタビュー

話し手： 上田 美佳 (うへだ みか) さん 平成19年3月 人間福祉学科卒業
医療法人好寿会美原病院精神科に勤務。卒業時、精神保健福祉士、社会福祉士の資格を取得。
聞き手： 桃尾 幸順

「和」の心はIBUで学んだ大切な宝物

現在のお仕事は？

美原病院（堺市美原区）の精神科で精神保健福祉士として勤務しています。具体的には、患者さんの相談相手をしたり、退院後の日常生活が送りやすいように支援したり、医師と患者さんの間に入って治療を受けやすい環境を整えたりしています。

お仕事で心がけていることはどのようなことですか？

まず、患者さんの立場に立って考えるということですね。そして、患者さんをよく知る。患者さんに寄り添うという気持ちも大事だと思います。大学で学んだ学園訓になっている「和を以て貴しとなす」という教えを大事にしています。精神科の治療というのはチームで行われます。医師・看護師・精神保健福祉士・患者・家族が一つのチームになって治療を進めるわけですが、その際、精神保健福祉士は医師側と患者側の間に立って、全体の関わりをより良いものにする役割を担っているのです。ですからチームの“和”というものを常に考えて行動しています。また、美原病院に勤める精神保健福祉士は7人いて、月に一度集まって会議をしていて、互いに協力しながら仕事をしているのですが、この精神保健福祉士同士の“和”というものも大切にしています。

仏教に触れることで人間が好きになった

社会人になって、礼拝の経験が仕事に活かされましたか？

子どもの入院患者さんの生活支援の一環で寺院へのお参りの付き添いがあります。その際には大学で仏教を学んだことが役に立っています。また病院で亡くなられた方のご葬儀の際、落ち着いた態度で対応できるのも、毎週の礼拝で仏教の儀式を経験したことが役に立っていると思います。



大学で仏教を学んだことで、心に余裕ができて仕事が楽しく感じられます。患者さん達の役に立てることが自分にとっても喜びであり、人を大切にす

気持ちや癒したいと思う気持ち、根本的に人間が好きだという気持ちを持つことができています。それは、仏教の影響もあると思います。

仏教の教えにある「感情をコントロール」することは、今の仕事においても重要なことです。大学で瞑想を行ってきたことで、落ち着きや集中力、気持ちの切り替えがしやすくなりました。



身も心も引き締まり、心落ち着く礼拝

その他に礼拝で得たものはありますか？

まず、制服を着ることで気持ちが引き締まりました。普段は私服ですから、週に一度の制服は新鮮に感じられました。聖歌も楽しかったですね。「父母の歌」や「みめぐみの」など今でも聖歌集があれば歌えると思います。

写経も楽しかったです。普段は筆ペンで文字を書くことがほとんどないので、いつも真剣に取り組んでいました。年配の入院患者さんには写経をしている方も居られ、その方たちとのコミュニケーションにも写経の経験は役に立っています。

実習生としての本学学生の印象はいかがですか？

四天王寺大学の学生さんは、他の実習生に比べて、落ち着きや余裕があるように思います。

そして切り替えが上手です。それは普段から瞑想を行っている成果ではないでしょうか。また礼儀正しい人が多いことも特徴的です。

礼拝はIBUにしかない貴重な時間

最後に後輩達へ何かアドバイス！

学生さんにとって、仏教の時間は睡魔が襲ってきたり億劫な時があるかもしれませんが、社会人の立場から言わせてもらえばとても貴重な時間だと思います。他の大学には無い時間ですから、仏教の時間を大切にしてください。

平成24年度「仏教I」の講話内容

- | | | |
|--|--|---|
| [第1回] 4月5日 桃尾 幸順 先生 礼拝説明—仏教Iの初めにあたって | [第6回] 5月17日 原 祐子 先生 仏教聖歌—声を合わせて歌う喜び | [第11回] 6月21日 南谷 美保 先生 仏像を知ろう—仏様に会いに行くとは？ |
| [第2回] 4月12日 西岡 祖秀 学長 建学の精神について | [第7回] 5月24日 兼子 恵順 先生 四弘誓願—利他の誓い | [第12回] 6月28日 藤谷 厚生 先生 般若心経—心を空にして智慧を活かす |
| [第3回] 4月19日 森田 俊朗 理事長 仏教について | [第8回] 5月31日 南谷 恵敬 先生 三帰依について | [第13回] 7月5日 源 健一郎 先生 回向文 私のためはあなたのため、 あなたのためは私のため |
| [第4回] 4月26日 桃尾 幸順 先生 瞑想—心を整える楽しみ | [第9回] 6月7日 藤谷 厚生 先生 懺悔文—日々の行いを正し、省みる心 | [第14回] 7月12日 倉田 義之 先生 薬物乱用・子宮頸がん予防—健全な学生生活を送ろう |
| [第5回] 5月10日 井川 好二 先生&学生 カンボジアでのボランティア | [第10回] 6月14日 上續 宏道 先生 開経偈—お経を読む心構え | [第15回] 7月19日 矢羽野 隆男 先生 学園訓—一人一人違うからこそ成り立つ「和」 |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 四天王寺 (大阪市天王寺区) —

このコーナーでは、これから毎号、聖徳太子ゆかりの地について紹介していきます。

第1回は、本学の母体である四天王寺です。学生みなさんは、入学試験の時に行われた面接試験の内容を覚えているでしょうか。本学の設立が、太子によって整えられた四箇院の制に基づくという説明を受けたはず。四箇院とは、寺院である敬田院、医療機関である療病院・施薬院、現代で言う社会福祉施設である悲田院からなります。当時の寺院の活動は、宗教的実践(仏道修行)と学問(経典解釈)を柱としました。敬田院の学問的側面を発展させたのが、本学、四天王寺大学です。四天王寺が、大学のみならず、病院や高齢者施設などの事業に取り組んでいるのも、太子の社会貢献の意志を継いでのことなのです。

四天王寺には、大学入学直後、みなさんは授戒会のために足を運びました。区の名称が「天王寺」であることからわかるように、四天王寺は、西方極楽浄土の入り口として、古くから天皇・貴族から庶民に至るまで広く信仰を集め、人々の生活に根付いたお寺でした。



四天王寺の起りについては、『日本書紀』に次のように伝えられます。崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏との間に武力衝突が起こった際、白膠木(ぬるで)で造った四天王像を頂髪に頂く太子が、物部氏を征伐できたならば四天王を安置する寺院を建立すると誓い、乱の後、摂津難波荒陵(あらはか)の地に堂塔を建てたのだと。

それは593年(推古天皇元年)のことでした。それ以来、千四百年以上、四天王寺は脈々と護られてきたのです。数年前から、本学日本学科(*)の新入生(希望者)は、授戒会の後、日本文化史を専門とする南谷美保教授の先導によって、四天王寺ツアーに参加しています。来年度からは、日本学科の先輩学生がツアーガイドをすることも企画されています。時代を越えて、人々が集う場であり続けるのも、太子のご縁と言えるかもしれません。

※平成24年度から、言語文化学科日本文化専攻は、日本学科に改組されました。



仏教のことば

— (UPĀYA) —

ウパーヤ(Upāya)とは、インドの古代の言葉であるサンスクリット語です。本来は「上へ向かって前進すること」、あるいは「高い目標へ到達すること」を意味しています。この言葉のUpāは接頭辞で、英語のupと同じで「上の方へ」という意味です。また、āyaは動詞で「接近する」「前進

する」「獲得する」と言った意味の言葉です。それ故、仏さまが、我々をより高い目標である、悟りの境地へ導いてくださる方法、つまり悟りへの導きそのものをウパーヤとよぶわけです。この言葉は漢訳では「方便」という語が当てられています。方便と言うと、「嘘も方便」という言葉がありますが、嘘をついて相手を悪い状況に陥れるのは、決して善いことではありません。これは、例え嘘をついても、相手がより良い状況に導かれるならば、それも善いのではないかという、譬えだと思われれます。経典には、仏さまが様々な方便を用いて、人々を救済される物語が説かれています。まさに、仏さまの教えは、我々が悟りの道へと向かうためのウパーヤ(みちびき)である訳です。

編集後記



今回の「UPĀYA」発行にあたり、たくさんの方々にお世話になりました。ご協力いただいた方にこの場を借りて感謝を申し上げさせていただきます。ありがとうございました。さて、今回の取材や制作の中で「仏教をわかりやすく伝える」という事に第一に思い、紙面を工夫をしながら作成いたしました。

今後も、「UPĀYA」を通じてわかりやすく「仏教」を伝えてまいります。(・)v

研究所員紹介

所長 西岡 祖秀(学長・教授)
主任研究員 兼子 恵順(教授)
研究員 矢羽野 隆男(教授)
源 健一郎(教授)
上續 宏道(准教授)
藤谷 厚生(准教授)
桃尾 幸順(講師)
南谷 恵敬(客員教授)

UPĀYA(ウパーヤ) 創刊号

平成24年9月1日発行

発行 四天王寺大学
仏教文化研究所 仏教教育センター
所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1
TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611
URL:<http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail soumu@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

